

特集

立命館大学スポーツ健康科学部の学位授与方針

伊 坂 忠 夫

要 旨

スポーツ健康科学部の人材育成目標は、「スポーツ健康科学の教育研究を通じて、グローバルな視野とリーダーシップを備え、スポーツ健康科学分野への理解を持ちつつ、社会の発展に貢献できる人材を育成すること」である。スポーツ健康科学部での4年間のカリキュラムを通じて、卒業時点で学生が身につけるべき能力（教育目標）は、以下の通りである。① スポーツ健康科学に関する科学的視点や基礎知識・基礎理論を、総合的・学際的に理解することができる。② 幅広い教養と国際的な感覚を身に付け、グローバルな視野からスポーツ・健康を分析・検討・実践していくことができる。③ リーダーシップ、コーチング理論への深い理解に基づいた指導を行うことができる。④ 豊かな倫理観および自らのキャリアに関する高い意識を持ち、社会の発展に自らの能力を役立てるという強い使命感を持つことができる。⑤ 社会貢献、地域貢献等を通じて、スポーツ健康科学を社会に広めて行くことができる。

キーワード

スポーツ健康科学、総合的・学際的な教育および研究、理論と実践、グローバルな視野、リーダーシップ、科学的視点、地域・社会連携

1. スポーツ健康科学部の開設趣旨

スポーツ健康科学部、同研究科の開設にあたっての設置趣旨のひとつとして掲げたのは、「いかに健康的で豊かな暮らしを送っていくか」という人類的な課題克服である。生活習慣病、肥満の問題は、先進国のみならず、発展途上国でも問題となっており、これらの問題を解決するには、その国における固有の食生活、生活習慣を考慮した健康科学からのアプローチが求められている。また、スポーツ科学の側面に関わって人類の限界に挑戦するスポーツ競技のトップパフォーマンスの向上は、最先端の科学的な観点からのサポートが不可欠となっている。この人類の限界値への挑戦を支援する課題も設置趣旨として掲げている。これらを含めた多様な健康やスポーツ課題を、実践的に取り組み、定着させるには、スポーツや健康に関わる組織を専門的な観点からマネジメントすることが必要不可欠である。そしてこのような課題とその解決は一つの分野で完結す

るわけではなく、互いに研究成果を共有しながら、また、研究に刺激を受けることによって、新たに高度な知見を得ることが必要であり、さらに、そのような融合によって課題解決を目指すことが可能となる。

近年の余暇時間の増大と労働内容の変化、平均寿命の漸増と少子高齢化を背景とした健康寿命延伸への期待と関心、生活習慣病予防による中長期的な医療費適正化対策、スポーツパフォーマンス向上のための科学的手法の確立、総合型地域スポーツクラブ等の展開による地域単位での運動習慣の発達・発展があり、我が国におけるスポーツ健康科学分野に関わる人材育成・研究推進についての社会からの要請は、ますます高まっている。このように、社会の変化によって、スポーツ健康科学分野には様々な実践的役割を果たすことが求められ、また、社会的要請に応えるように学問分野も発展し続けている。

これまで、スポーツ健康科学分野に関わる学問としては、スポーツと健康をキーワードとする「体育学」がその中心を担い、学際的な視野を有して発展してきた。しかし、今般のスポーツ健康科学分野における人類的課題の解決、学問領域の多様化・深化、体育学の持つ学際性をさらに発展させている。具体的には、関連諸科学である医学、保健衛生学、理学、工学、教育学、経済学、経営学等といった隣接する専門知識と連携し、さらなる総合的・学際的な融合発展をはかり、スポーツ健康科学分野が成り立っている。このような中、スポーツ健康科学分野の実践者・普及者としての人材ならびに教育・研究に携わり、学問分野の発展を中心的に担う専門職業人と研究者の養成が求められている。

以上のような、社会的要請および人類的課題にチャレンジすることで研究機関として新たな知見の発見に貢献すること、また教育機関として、有為な人材をこの分野内外へ輩出することを社会的使命にスポーツ健康科学部・大学院同研究科を 2010 年 4 月に同時開設した。

2. 立命館大学スポーツ健康科学部の特色

(1) 総合的・学際的教育・研究

本学部・研究科の専任教員 25 名は、医学、保健衛生学、理学、工学、体育学、教育学、経済学、経営学の分野から集まってきている。具体的には、運動生理学、生化学、トレーニング科学、スポーツ心理学、生体工学、スポーツバイオメカニクス、健康増進科学、栄養学、医学、脳科学、遺伝子生物学、運動処方、スポーツマネジメント、スポーツ教育、リーダーシップ等、幅広い分野の最先端の研究を実践している研究者が所属しており、図 1 に示すように、遺伝子から組織細胞、臓器、人体、動作・行動・心理、そして社会・集団というように、ミクロレベルからマクロなレベルまでを対象にスポーツ健康科学を探究している。さらには、各教員が自らの専門分野のみならず隣接する領域、分野の教員と連携することで、教員間での共同研究が総合的・学際的な取り組みとなっており、その効果は学部生ならびに院生の指導に及び、彼らの総合的・学際的教育をより推進している。

(2) びわこ・くさつキャンパスの特徴を活かした教育研究の推進

びわこ・くさつキャンパスには、理工系 4 学部（理工学部、情報理工学部、生命科学部、薬学

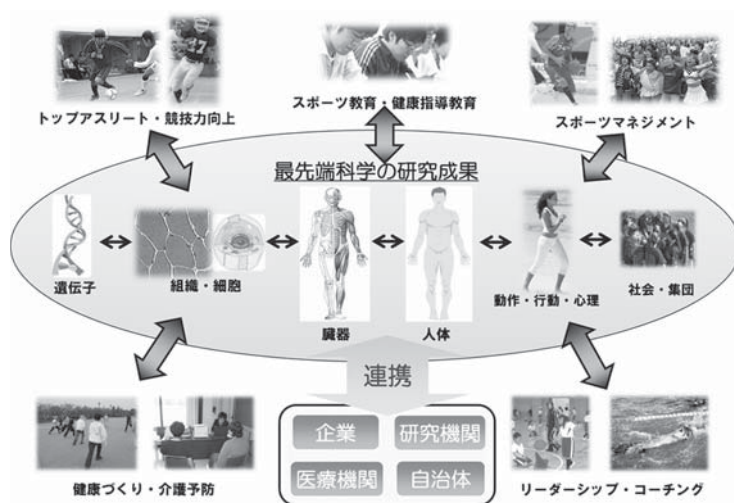


図1 スポーツ健康科学を探索する視点

①総合的・学際的教育、②国際連携型・地域連携型教育、③スポーツ界・産業界との連携



図2 びわこ・くさつキャンパスの特徴を活かしたスポーツ健康科学部の教育研究の推進

部) ならびに経済学部、経営学部の2学部および、理工学研究科、経済学研究科、経営学研究科、テクノロジー・マネジメント研究科が設置されており(2012年4月に情報理工学研究科、生命科学研究科が開設予定)、文理融合をコンセプトとしたキャンパスづくりがされている。他学部・他研究科との教育連携、研究交流によって、学際分野として本学部・研究科の総合的・学際的教育研究がより促進される基盤を有している(図2)。また、びわこ・くさつキャンパスは、アメリカンフットボール、女子駅伝等を含め、全国トップ水準のカレッジスポーツの活動拠点であり、カレッジスポーツを対象とした理論と実践による教育・研究プログラムが実施できる場となっている。

(3) 連携型教育・研究

本学部・研究科では、これまでの大学の教育・研究推進の資源・蓄積を活用した国際連携、地域連携、国内外のスポーツ健康産業界、学内研究科関連との連携、カレッジスポーツとの連携等、様々な連携型教育・研究を推進している。

国際連携に関わっては、スポーツ健康科学に関する最先端の研究を行っている大学・研究機関等との連携を図り、海外研修プログラム、海外インターンシップ等を実施している。地域連携に関わっては、滋賀県・草津市を中心とした自治体との連携の中で、小学校・高等学校を対象としたサービスラーニング（児童への運動支援、学外実習の補助等）を展開している。また、国内外のスポーツ産業界との連携に関わっては、共同研究、受託研究、寄附講座の提供、客員教授招聘、インターンシップ等を随時進めている。

(4) 理論と実践

本学部・研究科は、理論と実践の両輪を通じた教育・研究を実施している。講義科目で理論の基礎を修得しつつ、上記（3）で述べた連携先を通じた実践的研究を実施するシステムとなっている。また、リーダーシップ、コーチングは、学部ならびに研究科共通の基本コンセプトであり、これらは講義を通じて深く理論を理解するのみでなく、実習ならびに実践場面を通じた学修を重視したカリキュラムとなっている。

(5) 最先端の施設・設備・機器

総合的・学際的な学びや調査研究を行う施設として、学部・研究科の教育研究棟（6階建て、名称：インテグレーションコア）が建設され、この分野の教育研究に必要な最新鋭の施設・設備が一元配置されている。主なものは次の通りである。

- ① スポーツパフォーマンス測定室（約 300㎡）
動作解析用カメラ 16 台、高速度カメラ 3 台、フォースプレート 15 台
- ② 高機能画像撮影室（約 100㎡）
全身用 MRI（1.5 テスラ）、X 線骨密度測定装置（DXA）
- ③ 栄養調理実習室（約 85㎡）
オープンキッチン、映像収録システム、食育 SAT システム
- ④ トレーニング指導実習室（約 150㎡）
トレーニングマシン各種、トレッドミル、フリーウエイト
- ⑤ スポーツ健康指導実験室（約 200㎡）
超音波エコー、呼気ガス代謝装置、質量分析計、筋力測定装置、3次元形態計測システムなど
- ⑥ 応用スポーツ科学実験室（約 100㎡）
エネルギー代謝測定室（カロリーチャンバー）、低酸素トレーニング室、低酸素実験室、防音シールド室
- ⑦ 生理学系の実験・分析スペース（約 350㎡）
基礎医学実験管理室、生化学解析室、運動生化学実験室

- ⑧ スポーツ教育実習室およびスポーツマネジメント実習室（約 140㎡）
- ⑨ 研究実験室（12 室） およびその他実習室（3 室）

3. 人材育成目標と学位授与方針（ディプロマポリシー）

スポーツ健康科学部の人材育成目標は、「スポーツ健康科学の教育研究を通じて、グローバルな視野とリーダーシップを備え、スポーツ健康科学分野への理解を持ちつつ、社会の発展に貢献できる人材を育成すること」である。

スポーツ健康科学部での4年間のカリキュラムを通じて、卒業時点で学生が身につけるべき能力（教育目標）を以下の通り定め、これらの能力の獲得と所定の単位の修得を持って、人材像の達成とみなし本学部で身につけるべき学士力を持った人材として、学士（スポーツ健康科学）の学位を授与する。

- ① スポーツ健康科学に関する科学的視点や基礎知識・基礎理論を、総合的・学際的に理解することができる。
- ② 幅広い教養と国際的な感覚を身に付け、グローバルな視野からスポーツ・健康を分析・検討・実践していくことができる。
- ③ リーダーシップ、コーチング理論への深い理解に基づいた指導を行うことができる。
- ④ 豊かな倫理観および自らのキャリアに関する高い意識を持ち、社会の発展に自らの能力を役立てるとい、強い使命感を持つことができる。
- ⑤ 社会貢献、地域貢献等を通じて、スポーツ健康科学を社会に広めて行くことができる。

4. カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施方針）とディプロマポリシーの関係

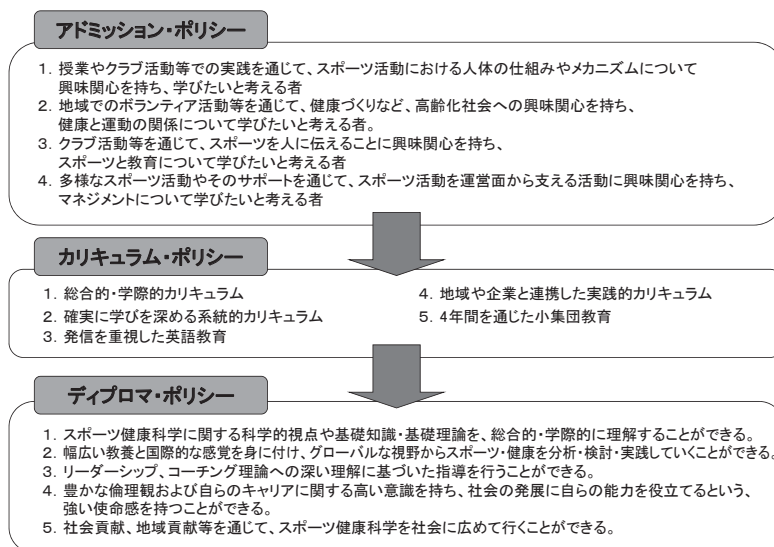


図3 スポーツ健康科学部の3ポリシー
（アドミッション、カリキュラム、ディプロマ）

学部の特色を2.で示したが、この特色がカリキュラムポリシーにつながっている(図3)。ディプロマポリシーを達成するための本学部のカリキュラムポリシーは、次の通りである。

- ① 総合的・学際のカリキュラム
- ② 確実に学びを深める系統のカリキュラム
- ③ 発信を重視した英語教育
- ④ 地域や企業と連携した実践のカリキュラム
- ⑤ 4年間を通じた小集団教育である。

ディプロマポリシー達成に向けて、これらのカリキュラムポリシーにもとづき学士力をつけていく。具体的には各ディプロマポリシーの項目とカリキュラムポリシーの関係を以下に説明する。

(1) スポーツ健康科学に関する科学的視点や、基礎知識・基礎理論を、総合的・学際的に理解することができる



図4 スポーツ健康科学部の履修スケジュール

スポーツ健康科学は、学際的な学問分野であり、この分野の理解を深め、応用できる力量を身につけるためには、基礎専門科目の理解が必要である。リテラシー科目ではこの分野での学びに必要な基礎的ツールを身につけ、基盤科目では、専門力量を修得するための自然科学的アプローチ、社会科学的アプローチで学ぶ科目をバランス良く配置している。特に、主要な科目は必修科目として設定し、総合的・学際的な学びを保証している(図4)。

基礎専門科目を修得した後に、各コースの専門科目を学ぶことで、スポーツ健康科学の専門性を深められスポーツ健康科学を科学的視点で捉え、分析・検討・実践していく力を養成すること

ができる。専門科目では、自分の所属コース以外の科目も履修し、幅広い専門力量を身につけ、総合的・学際的にスポーツ健康科学を多面的に切り開く力を養成する。

(2) 幅広い教養と国際的な感覚を身につけ、グローバルな視野から分析・検討・実践していくことができる

教養科目等を通じて大学で豊かな教養を身につけることは、確かな専門性を積み上げるための基礎となるだけでなく、人生を豊かにすることにもなる。また国際社会の一員として活躍するための豊かな教養を修得し、人文科学、社会科学、自然科学に支えられた学問、文化を通じて国際的な視野と感覚を身につけることができる。

さらに、各自の能力を発揮し社会の発展に貢献するためには、コミュニケーション能力が求められる。特に、国際化の流れの中で、英語を使用する機会が多くあり、この学部では、自らが主体的に英語で発信するコミュニケーション能力ならびに運用能力を高めるための英語教育を展開し、国際化社会に対応した英語コミュニケーション能力を身につけるカリキュラム内容を構成している。

(3) リーダーシップ、コーチング理論への深い理解に基づいた指導を行うことができる

スポーツコーチ、教員、健康運動指導士のみならず、組織の中で指導的役割を果たすためには、リーダーシップを発揮し、構成メンバー（生徒・学生・選手・運動教室参加者など）の能力を引き出すためのコーチング力が必要とされる。スポーツ健康科学部では、スポーツの現場だけでなく、社会のあらゆる場面でリーダーシップ、コーチング力を発揮できるようにするために、「リーダーシップ論」、「コーチング論」等の科目から、これらの科学的な理論を学ぶ。同時に、コーチング実習科目を通じて、具体的な指導実践の中でリーダーシップ、コーチング力を体験的に深める。さらに、インターンシップ、サービスマネジメントなど現場での経験を通じて、より高い指導力を獲得するようにカリキュラムを配置している。

(4) 豊かな倫理観および自らのキャリアに関する高い意識を持ち、社会の発展に自らの能力を役立てるといふ、強い使命感を持つことができる

スポーツ健康科学部の教育課程を通じて、社会人の基礎力といわれる、①前に踏み出す力（主体性、働きかけ力、実行力）、②考え抜く力（課題発見力、計画力、創造力）、③チームで働く力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスマネジメント力）を養成する。また、現代の社会においては、倫理観の高い行動が求められており、ハラスメント（セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメント等）だけではなく、企業活動においても企業の社会的責任（CSR）や環境問題への取り組みなど、その行動に倫理観が求められている。この点については、「基礎演習」、「スポーツ法学」などの科目を中心にして、倫理観を形成するようにしている。このような力を身につけることにより、自らのキャリアに対する高い意識、動機を持ち、社会の発展に自らの能力を役立てるといふ使命感をもって取り組める人材を育成する。

(5) 社会貢献、地域貢献等を通じて、スポーツ健康科学を社会に広めていくことができる
 キャリア形成の科目である「スポーツ健康科学セミナーⅠ・Ⅱ」ならびに「インターンシップ」、
 「サービスマーケティング」を通して、多様な業界や働き方等を理解するとともに、具体的な実践活
 動・体験学習による学びを経験することで、深いキャリア意識、将来へのビジョン形成および強
 い使命感を養成している。同時に、これらの科目を通じて自らの活動・行動が周囲や社会へ与え
 る影響を的確に理解できるように意図している。このような実践的な活動を通じて、社会や地域
 で何が求められるのかを理解し、スポーツ健康科学を実学として社会に広めていく力を養成して
 いる。

5. カリキュラムと各コース（各領域）の特徴

スポーツ健康科学部では、「科目区分」、「小科目区分」ごとに必修科目や要卒単位数を以下の
 ように、細かく規定すること、ならびに学士課程の集大成としての卒業論文を必修とすることで、
 「学習効果」、「学士課程の質保証」を担保している。

科目区分		必修科目単位数	要卒単位数		
基礎科目	教養科目	—	20 以上		
	外国語科目	8	8		
基礎専門科目	リテラシー科目	2	4	32 以上	
	基盤科目	8	22		
専門科目	自コース	—	10	50 以上	
	他コース	—	14		
	共通科目	—			
	実習科目	コーチング実習	—		2
		身体科学実習	—		2
小集団科目	4	4			
計		22	124		

※留学生は一部、カリキュラムが異なります

各コースで養成すべき人材としては次のように考えている。

① スポーツ科学コース

自然科学的概念を用いてスポーツを解析し、競技力向上に貢献する方法を理解するとともに、そこで得た理論を実践へ合理的に応用できる人材を育成する。

② 健康運動科学コース

健康を維持・増進するために、運動や栄養摂取が健康に果たす役割や身体に与える影響・効果を適切に理解します。また、健康に関わる課題に対して具体的な運動プログラム等を提案することができる人材を育成する。

③ スポーツ教育コース

スポーツに関わる分野の指導スキルならびに教育に関わる幅広い関連知識を身に付け、

リーダーシップを発揮できる高度な教育力を有する人材を育成する。

④ スポーツマネジメントコース

様々なスポーツ組織や健康関連組織の運営を理解するとともに、そのような組織の社会との関わり方の理解を深め、組織内でリーダーシップ、コーチング力を発揮できる人材を育成する。

学部卒業後のキャリアとしては、民間企業人（スポーツ関連企業、大手健康フィットネス等、メーカー、MR、流通、生命保険・損害保険、金融機関、マスコミ）、中学校・高等学校教諭、公務員、スポーツコーチ、選手（社会人／プロ選手を含む）、大学院進学を想定している。

6. 学びの集大成としての卒業論文

スポーツ健康科学部における卒業論文作成は必修であり、卒業の重要な要件である。その理由は、この卒業論文をスポーツ健康科学部における学びの集大成として位置づけており、ディプロマポリシーに示した人材像達成のための一つの大きな柱として考えているためである。

卒業論文は、講義科目から得た知識だけでなく、実習系科目や小集団科目である基礎演習、研究入門、そして専門演習に至るまでの一連の学習で身につけた知識と方法を活用し、その成果としてまとめることになる。すなわち卒業論文は、学生一人ひとりが主体的かつ自律的な姿勢で研究に臨み、研究テーマの設定から実験や調査の計画、データの収集から分析、そして結論に至るまで、持てる力を最大限に発揮し、スポーツ健康科学部で学んだ専門的な知識や能力を証明するものであり、ディプロマポリシーに示した能力の達成を示す大きな指標（成果）となるものである（図5）。

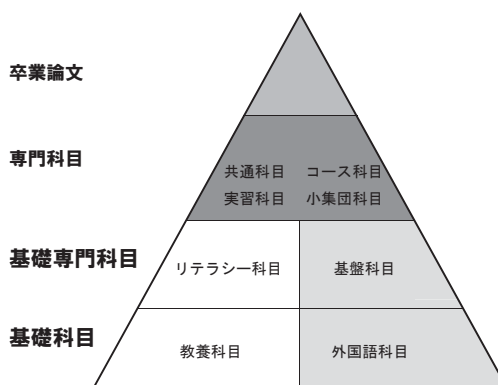


図5 学びの集大成としての卒業論文

7. おわりに

「スポーツ健康科学」という学問分野は、1. で述べたように人類的課題にチャレンジする学問分野であり、かつ社会的にも有意な人材が求められる分野である。上述してきたように、このスポーツ健康科学部では、この分野の専門性を理論と実践を通じて学ばせるとともに、総合的・学際的な学びを通じて、文理総合型の基礎力を身につけることを目標としている。同時に、これからの社会において重要とされるリーダーシップ、コーチングの力量を持って社会に活躍してもらうことが、この分野の発展にとって不可欠の要因になる。これらの人材育成像に基づいて、ディプロマポリシーを定め、その達成のためのカリキュラムポリシーを策定し、教育実践を行っている。卒業生輩出までの約2年間で、構想したディプロマポリシーにかなう人材を、卒業時に世の

中に送り出せるようにしていきたい。そのために、各回生での目標達成を評価できるシステムの構築が必要である。このシステムにより学生が自己評価し、課題を明確にするとともに、教員側も科目間のつながり、ディプロマポリシー達成に向けた連携を促進できるようになると考えている。

スポーツ健康科学部は、本学における一番新しい学部であり、これまで本学が取り組んできた教育実践のエッセンスを学部教育のシステムに積極的に取り込んできた。今後も他学部のみならず他大学の優れた教育実践を積極的に取り入れながら、教学理念を達成するための教育実践を深めていきたい。そして、スポーツ健康科学の分野がもつ総合的・学際的な学びとともに、この分野の高い専門性を身につけ、グローバルに活躍する人材を輩出し続けることを願っている。

Diploma Policy in the College of Sport and Health Science, Ritsumeikan University

ISAKA Tadao (Professor, College of Sport and Health Science, Ritsumeikan University)

Abstract

It is the educational goal of College of Sport and Health Science to foster students who are equipped with global mind and leadership through the study and research of sport and health science and who can contribute to the development of society with an understanding of the field of sport and health science. What our students must achieve through the curriculum are the followings: (1) scientific point of view on sport and health science and an interdisciplinary understanding of it; (2) extensive knowledge of liberal arts, international perspectives and the ability to analyze and practice from a global point of view; (3) coaching ability on the basis of deep understanding of leadership and coaching theory; (4) high morality, consciousness of one's own career and strong vocation to utilize one's own ability for the development of society; (5) spread of sport and health science through contribution to society and local community.

Keywords

sport and health science, theory and practice, interdisciplinary understanding, international perspectives, leadership, and scientific point of view

